蘇州古典園林における設計手法

―伝統的庭園手法の現代への応用に関する考察―

建築 郭 紫曄 指導教員 八尾 廣 建築設計計画 I 研究室

1. はじめに

1. 1 研究の背景と目的

中国では近年の急速な経済発展において様々な都市開発が行われてきたが、現代の都市開発や建築で作られてきた庭園やランドスケープに対して伝統的な文化の継承がなされているとは言い難い。伝統的な庭園要素を用いた庭園であったとしても、古典的な様式を単に模倣したようなデザインが多くみられ、設計手法を現代的に解釈し、本質を継承するような事例は極めて少ない。本研究では、蘇州古典園林^{注1)}を対象として、伝統と文化、人と自然の調和等の観点から、現代の設計手法への応用について考察し、さらに、日本の伝統的庭園や庭園の継承との比較を通して、中国古典園林手法を現代庭園に生かす手法についての考察を試みる。







図 1 拙政園嘉実亭、滄浪亭の月門、留園緑陰軒

1. 2 既往研究

中国で最初の古典庭園に関する文献は明代の計成による造園技術書「園冶」である。古典園林に関する代表的な著作には、童寓の「江南園林志」、刘敦楨の「蘇州古典園林」、彭一剛の「中国古典園林分析」が挙げられるが、この内、「中国古典園林分析」は過去の華麗な文学的表現を用い古典庭園への賞賛を重視した他の文献とは違い、1.近代的な空間理論の観点から伝統的な造園手法を分析した研究として知られる。日本では皇室庭園から江南庭園^注っまで幅広く記述した佐藤昌の「中国造園史」がある。また、河原武敏の一連の中国庭園研究における特色、技法と関連用語の整理は本論の考察にも大きな影響を与えた。

1.3 研究対象と方法

本研究では「拙政園」、「留園」及び、宋代の「滄浪亭」を研究対象とした。既往研究および関連文献把握した上で現地調査を行い、刘敦楨著:『蘇州古典園林』に記載の平面図と現状との違いを把握し修正を加え、分析図を作成し研究に用いた。

1. 4 研究方法

研究の方法は以下四つの過程にまとめられる。

風土分析:古典庭園の起源と形成過程には、所在地の地理環境及び当時の社会状況と文化的発展などが密接に関連している。したがって、関連文献を調査し、中国古典園林の基本概念、歴史的発展過程及び文化的背景を把握し、中国古典園林の発展経緯を整理した。

空間分析:現地調査と平面図に基づいて、蘇州古典園林 内の空間に影響を与える要素を抽出し、分析図を作成し た。現地調査の過程で異なる庭園空間の対比にも着目し ながら庭園の空間構成について分析した。

要素分析:現地調査と文献資料に基づき、景観を構成する要素を分類し、これらの空間における機能を考察した。体験分析:現地調査において、動線に沿う各ポイントで得られた写真や諸要素のスケッチを用い、主観的な体験を描出した。この過程にもとづき、環境から受ける心理的影響や人の振る舞いについて考察した。

分析図は庭園構成要素を分類し、以下の通り作成した。 1) 現場に基づく図面の補正:刘敦楨著『蘇州古典園林』 に記載の平面図と現状との違いを把握し修正。

- 2) 景観構成要素の分類と図示 (現地調査に基づく)
 - ①主要要素:築山・水景・建築物を図示。
 - ②**補完要素**: 廊と境界壁を図示。(主要要素を補完し 空間を分節する要素)
 - ③ 開口部:境界壁に穿たれた開口部を図示。
 - ④動線・眺望点・視線の向き: 現地調査における庭園体験に基づき、動線と、それ に沿って配置された眺望点および視線の向きを図示。
- 2. 中国古典園林について

2. 1 中国古典園林の定義と特徴

蘇州古典園林は人口密集のため自然風景に乏しい都市で、人と自然との調和を追求し、環境を美化し改善する一種の創造である。中国古典園林を知るには、哲学と美学、伝統的な中国文化を理解することが重要である。

2. 2 中国古典園林の発展軌跡

数千年にわたる中国古典園林の歴史には、誕生期^{注 3)}、 転機期^{注 4)}、全盛期^{注 5)}、成熟期^{注 6)}の4つの発展段階がある。

2. 3 時代の歴史と美学が古典庭園に与えた影響

封建的社会における厳しい社会制度の中で、庭園は精神 の隠れる場所と位置づけられ、設計者の心境を反映しな

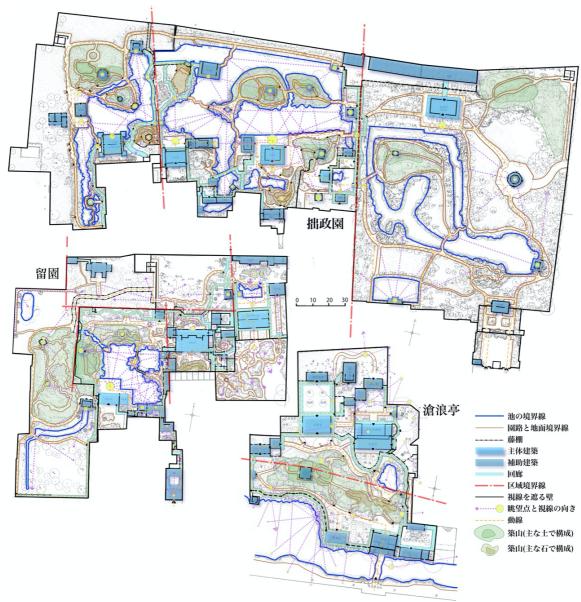


図 2「拙政園」、「留園」、「滄浪亭」全体分析図

がら使用者の心も魅了するものであった。文人思想や美学的判断が庭園観賞の主流になり、山水に自らの感情を 託し伝統的な文化思想を維持したと言える。

3. 実地調査

3. 1研究調査内容

滄浪亭は蘇州城南にあり、現存する最古の庭園である。 北宋時代に建造され、元時代には仏寺になり、次第に荒 廃したが、園林の入り口として石橋を作り現状に至った 1873年に全園が再建され今日も修復が継続されている。

滄浪亭は水に囲まれ、丘を囲うように回廊が巡らされて、園外からも観賞できる唯一の蘇州古典庭園である。 最初は橋がなく、船でしか入れなかった。入園すると、 まず目の前の東西に伸びる築山に視線を遮られる。築山 は東側が土石の混合、西側が主に石山である。滄浪亭は 東側築山の頂上に建っている。滄浪亭は面積が小さい庭 園であるため、高い壁に囲まれた形式を破り、仏寺及祠として改造された経緯により、現状のような開放性の高い庭園形式となった。 滄浪亭は立地周辺の地理環境を反映するように、その設計や配置は形式にこだわらず自由な気風を示している。

拙政園は「王氏拙政園記」によると、西暦 1506-1521 年に寺院から官邸に改築されて以来、園主が絶えず代わることによって幾度も改築された後、1949 年以降全面的に補修された。配置は水景を中心として展開し、建物配置が疎らで、現状は中央部の「拙政園」、西側の「補園」、東側の「帰園田居」の三つのエリアを含み、これらの総称が「拙政园」である。1962 年に入り口は新たに東側に移設された。拙政園の景観要素の配置は園全体に及び、中央の池の面積は中央部の 3/1 を占め、建物は水景に絡むように配置された。池の中央には土石を積み上げた築山

が二つある。回廊を境界線として西側の補園と隣接し、 住居部分につながる。東側にも築山があり、頂きに建つ 宜两亭は重要な眺望点となっている。裏庭の景観要素と して、主として岩石を積み上げた大きな築山が、主要な 建築物の周囲に築造されている。

清朝後期に築造されて以来数百年間、園主が次々と替わる過程を経たこの庭園は、過去の様々な様式と出会える場ともなっている。

留園は明朝時代に建造されたが西暦 1876 年に修復され、

劉園と同じ呼称の留園に改称された。中央部、東側、西 側、北側の4区域に分けられた。留園の景観要素は拙政園 と比較して密集しているが、雑然とした印象を与えない。 中央部は池を主体として築山と建物が取り囲み、廻廊 と橋で連結する。中央部の廻廊は西北側の壁に沿って東 側に延びており、設計者は単調だった園路に多くの変化 を加えた。主な動線は建築と廊により構成され、一般的 な園路はほとんどの場合、補足的な動線となっている。 築山と水景が繋がり、広い水景の中に小島を築造して、 水景空間に豊かさと観賞動線を付与している点は、拙政 園と同様である。東側は建物で占められ、主庁の周囲の 補助機能を備えた建築、小庭、回廊や壁を利用しいくつ かの小さな空間や通路に分け、様々な開口部や植物も相 まって、限られた空間に豊かな変化が生み出されている。 北側と西側の庭園は静かで素朴な田園と山風景を作り出 している。留園を景観要素から見ると、庭園の南西角か ら東北角を結ぶ軸線により、建築景観を主とする区域と 自然景観を主とする区域が分けられており、その中心部 に水景が位置する構成となっている。観覧者は技巧を凝 らした建築景観を楽しみ、やがては自然の山林風景まで を散策し、別有洞天の洞道を通り抜けて起点に帰るとい う演出がなされている。留園は、大小、明暗、曲直など の対比的な設計手法を用い、視覚的な効果を作り出すこ とに優れており、各区域の間は壁で隔てながら廊で繋ぎ、 漏窓などの多様な開口部で互いの領域相互の浸透を生じ

3. 2 構成:建築、廊、壁、開口部

と多様な観賞の可能性を生み出している。

蘇州古典庭園は空間を分割する手段が柔軟で、壁、廊、

させ、対比の効果によって、限られた空間に無限の変化

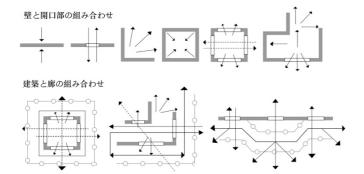


図3 建築と廊、壁と開口部の組み合わせ

建築、橋、植物と築山などすべては空間を様々な形で分節する役割を担い、空間に変化をもたらしている。多様な要素を複合的に用いて全体のバランスをとっている。

建築:蘇州古典庭園の建築は観賞と使用の二重機能を持ち、特徴は小さく精巧で、配置密度が高い、最も重要な景観要素である。庭園建築は整然とした形式感を避けて、好みに応じ多様な意匠を凝らし創っている。

主な庭園建築用語:庁、堂、館;楼、閣;榭、舫;軒、 亭かど

廊:建物間を結ぶ通路であり、建築の一部としての線形の建築物である。蘇州古典庭園では、曲がりくねった廊は欠かせない要素である。観賞経路に沿って遊覧や休憩ができ、悪天候時には避けられる場所である。廊は空間を仕切りながら視線を遮らず空間の相互浸透を生み出す。主な廊の用語: 敞廊、復廊、曲廊、回廊など

壁:壁は重要な景観要素として多様な変化を生み出し独特な効果を引き出す。住宅を守る機能的な壁を起点とし、庭園の拡張に伴い廊と組み合わされた壁が生み出され、空間の変化を創造される。壁の形態には、様々な地形や状況に対応することで、婉曲、起伏、開口部付設など新しい形式が生み出されてきた。

開口部:壁と開口部は密接に関係し、空間を仕切る壁と空間相互を繋ぐ開口部は蘇州古典庭園設計手法の独特な <漏景>と<框景>を生み出す要素である。様々な開口 部が単調な壁に無限の可能性をもたらしている。

主な開口部用語:長窓、漏窓、空窓、洞門など

3. 3 構成:水景と築山、畳石と花木

水景:水景における集中と分散の変化を操る手法は「集散」と呼ばれる。いくつかの水景は集散手法を採用し、水と陸地を織り交ぜ、池がどこまでも続く錯覚を与える。水景の自然性を体現し、生き生きとした躍動感を与える。 築山:築山は水景と緊密に連携し、自然形態の採り入れを重視し、古来、職人の技巧の成熟に伴い多様化した。 一般的には土と石で構成され、山体を細長く造成することにより空間を分節し、視線を遮る効果がある。

畳石:畳石は自由な設計手法により造られる。池岸は自然な曲線を追求し、池から陸地への連続性を形づくる。 観賞石は一般的には1石から2、3石を組み合わせて造られ、その外観は想像の世界を体現している。珍しい石を集め、偉大な志や美しい願望を表現する役割をもつ。

花木:草花や灌木は築山の斜面や庭を彩り、地勢の変化や 不足を補い、空間を豊かにする重要な役割をもつ。植物は 園主の思想をも表現している。

3. 4 設計手法:有限から無限の空間を生み出す

蘇州古典園林はいずれも都市中心部に位置しており空間に余裕がないため、限られた空間にできるだけ多様な庭園景観が現れるよう努め、いかなる小さな空間も見逃さず、多様な世界を十分に表現するよう設計されている。

3. 4.1 景観構成における主要な概念の抽出

本研究における分析を通して、景観設計手法における 6 つの主要な概念を抽出した。

対比:よく見られる設計手法の一つである。明暗、大小、 広狭、虚実、高低、開合などを対比的に扱う手法で、空間にめりはりを与え、景観の変化を最大限に引き立てて 視覚的、心理的なインパクトをもたらす手法である。

借景:視線が及ぶ範囲の庭園外の風景を景観に取り入れる手法。庭園の面積が限られているため、景観のスケールを拡大する効果を生む手法である。

対景:「対」は相対的な意味で、景観相互を相手の景観要素として作用させる手法。場所 A から場所 B を観賞し、場所 B から場所 A も観賞できることを意識する手法である。

框景:門の枠、窓枠などの開口部を利用し、「額縁」中の 絵を埋め込むような造景手法である。框景は風景画の构 図原理を利用して、古典庭園の優れた部分景観を枠内に 収めることにより、近景と遠景を同時に観賞できる。

漏景:漏窓を用いた設計手法。建物や壁に漏窓を設け、 格子の隙間を通して庭園外や壁の向こうの美しい景観を 観賞する。

障景:正面への視線を遮り好奇心と期待感を生み出すことにより、空間の奥行きに対する感覚を持たせる手法。

3. 5 蘇州古典園林の直面する苦境

古典的芸術としての枠内に収まり、現代の文化、現代の都市とは切り離されており、周囲との連続性が断たれていることは大きな問題であると考える。

3.6 まとめ

蘇州古典庭園には、景観、建築と環境、自然、文化など多様な要素が凝集され、文化的背景と結びついている 奥深い造園手法がある。

4. 革新と伝統に関する考察

伝統的な庭園は、特定の地理環境や政治、地域性や歴 史・文化が体現された総合芸術である。最後に中国と日 本の庭園を比較し革新と伝統に関する考察を行った。

中国庭園は詩画に描かれた理想世界に対する追求であり、生活の享楽と山水の景観を結び付けることを強調しする。日本は自然に対する感性が中国とは異なり、自然を世俗的な雰囲気とは切り離し、自然そのものを味わう指向がある。中国古典庭園は本土の地理構造を体現し、本質的に中国の地形を模倣する。日本庭園は海に囲まれ山地が多い本土の地理環境を写すように、海とそこに浮かぶ島々の景観を表現している。ともに自然との間に調和共存の融和関係を持つ点では共通しているものの根底に流れる自然に対する感性には違いがある。外来文化を受け入れ、融合させた日本文化の発展過程は、日本庭園が今日の芸術への影響を強くもつことと深く関係しているのではないか。中国においても、古典的な庭園の文化を現代に継承することは可能なはずである。

5. 結論

蘇州古典園林は池を配置して庭園と建築の関係を豊か に関係づけ、古典庭園の技法に優れたものである。庭園 は精神の隠れる場所と位置づけられ、設計者の心境を反 映しながら使用者の心も魅了するものであった。蘇州古 典園林は空間を分割する手法が柔軟で、壁、廊、建築、 橋、植物と築山等を巧みに使い分け、空間を分節しなが ら多様な庭園を形成している。本論の調査・分析により、 蘇州古典園林の空間構成について以下五つの特徴を明ら かにした。1)蘇州古典園林は歴史的背景などの風土的 要素と密接に関係していること。2)壁や築山、回廊等 で空間を分節しながら性質の異なる庭園を創造・複合し、 それらを多様な開口部で結びつける手法を有すること。 3) 造園における景観要素が互いに関係を結ぶように配 置されていること。4)景観構成において、対比、借景、 対景、框景、漏景、障景、という6つの重要な概念を有す ること。5) 小さな空間の積み重ねにより、限られた空 間に無限の可能性が付与されていること。

蘇州古典園林は古人に「観える、遊べる、住める」場所を提供し、思想と審美を体現し、実用を重視する同時に、美学的にも高い芸術性を体現した。設計者が世界を構築する想像力と感性を豊かに持ちその手法には現代における庭園やランドスケープの設計に生かせる部分が多くあることが確認された。本論では蘇州古典園林の空間的構造を明確に示し、その多様な手法を整理するにとどまったが、これらの手法を現代に応用し、文化を継承する現代のデザインに関する探究を今後の課題としたい。

注

注 1) 中国江蘇省蘇州市には紀元 900 年代 (宋代) から紀元 1600 年代 (清代) までに建造された庭園を総称した。

注2)中国に長江下流の南岸から地域の古典庭園。

注 3) 奴隷制社会に奴隷主や帝王達が狩猟と祭祀ための「囿」は庭園雛形とする。 注 4) 南北朝時代社会が不安定し、仏教と道教の影響を受けて自然趣味を表現され詩画に興って、古典主義初期の美学が確立、古典庭園発展に深い影響である。 注 5) 隋唐時代は「自然の美」に対する理解をさらに深め、川の水を取り入れ、 規模は大きくなり、内容も豊かで、自然景の上に人工物を加えて作り上げた。 注 6) 宋代は「文人画派」が現れ、形の似たようなものを求めずに、心を込めて 思想を伝え、画の構想や構図の要領は古典庭園芸術に影響を与えた。

参考文献

- 1) 彭一剛:中国古典園林分析,中国建築工業出版社,1986
- 2) 童寯: 東南園墅, 湖南美術出版社,2018
- 3) 刘敦楨:蘇州古典園林,中国建築工業出版社,2005
- 4) 寧晶, 王昀, 曹汛: 中国庭園の世界, 左右社, 2015
- 5) 佐藤昌: 中国造園史(下巻), 凸版印刷株式会社, 1991
- 6) 小野健吉: 日本庭園の歴史と文化,吉川弘文館,2015 7) オギュスタン・ベルタ: 風土の日本,筑摩書房,1988
- 8) 河原武敏: 中国庭園の墻と門窓の特色, 日本庭園学会誌 20,47-54,2009
- 9) 河原武敏: 中国における庭園建築の特色, 日本庭園学会誌 17,2007
- 10) 河原武敏: 中国における庭園植栽の特色, 日本庭園学会誌 182, 2007
- 11) 河原武敏: 中国庭園における「景」の構成(2)—「景」に関する用語の考察 , 京都造形芸術大學, 2004
- 12) 大野暁彦, 李可欣, 章俊華, 三谷徹: 蘇州園林における池護岸と園林建築の テデザインの相関性に関する研究, ランドスケープ研究76(5), 2013
- 13) 王暁田, 孔明亮, 三谷徹, 章俊華:中国蘇州私家園林における扁額からみた 建築類型別の庭園空間の特徴, ランドスケーブ研究 77 (5), 2014